



TITLE:

中國紡績事業の性格と日華經營の對立

AUTHOR(S):

西藤, 雅夫

CITATION:

西藤, 雅夫. 中國紡績事業の性格と日華經營の對立. 東亞經濟論叢 1943, 3(1): 117-142

ISSUE DATE:

1943-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/128730>

RIGHT:

所究研濟經亞東

學大部國帝都京
內部學濟經

年四回(二月、五月、八月、十一月)發行

叢論濟經亞東

號壹第 卷參第

月二年八十和昭

- | | | | | | | |
|--------------------------------|---|---------------------------|-----------------------|---------------------------------|--------------------------|----------------------------|
| イギリスの支那進出と重商主義……………經濟學博士 高垣寅次郎 | 唐代民間に於ける度量使用習慣の實情と布帛測定尺の一實例……………文學博士 那波利貞 | 東印度外國商業の特質……………經濟學博士 目崎憲司 | 唐代の貨幣思想……………經濟學士 穗積文雄 | 中國紡績事業の性格と日華經營の對立……………經濟學士 西藤雅夫 | 支那製絲業の生産形態……………經濟學士 堀江英一 | 支那紡績勞働力の質的吟味……………經濟學士 岡部利良 |
|--------------------------------|---|---------------------------|-----------------------|---------------------------------|--------------------------|----------------------------|

(禁轉載)

賣發 閣斐有 肆書

中國紡績事業の性格と日華經營の對立

西 藤 雅 夫

周知の如く、十九世紀末より二十世紀の初頭にかけてより以來、一國に於て生産したる商品を外國に輸出すると云ふことの外に、進みて工場設備その他の資本を國外に移轉し、これを以てその國で經營を行ふことが、頗る顯著となつたのである。斯くの如く單なる資本の輸出に止らざるところの、經營の輸出をなす者は、云ふまでもなく既に資本主義的に成熟したる國民經濟であるが、その相手方たる輸入者として、中國は世界經濟のうちにありて、頗る有力なる對象となるに至つた。

いま一國の國民經濟の他國の國民經濟に對する進出は、もとよりさまざまの形で行はれ得るであらうけれども例へば證券投資や貸付などによる單なる資本輸出よりは、この經營そのものの輸出の方が、その利潤の獲得が大なる點に於て、輸出者たる國民經濟に對して大なる貢獻をなし得ること、また改めて述べるまでもない。この際輸出せられる經營は、本國に於けるそれと全く無關係たり得ないのであるが、それが相手方たる國民經濟に於て、一應調和的に取り入れられるとすれば、この國民經濟は、輸出者たる國民經濟と、何らかの點に於て結び付

けらるべき組織を持たざるを得ないのである。

もとよりこの調和は、飽くまで一應のものであつて、根本的ではあり得ないであらう。即ち、同種の事業の經營は、輸入者たる國民經濟に於ける民族資本によつて、或ひはこの輸入の以前から、或ひはその後に至りて行はれるであらうから、この種の經營は、輸入せられたる外國資本による經營に牽制せられ、支配を受けながらも、或る程度までこれに拮抗し、その獨自の存立を續けて行かうとするであらう。然る場合にこの對立は、また、輸入者たる國民經濟の様相を特殊のものたらしめざるを得ないのである。この國民經濟がしばしば半植民地的と云はれるのは、一面この意味に於て理解することが出来る。

中國に於ける斯くの如き外國資本による經營は、紡績事業に於て特に著しい。而かもその中核をなすものは、實に、我國資本によるところの所謂「在支紡績」である。一九三六年の推定によれば、我國の對華投資總額八億四千萬圓のうち、紡績事業は三億圓の大を占めてゐる。¹⁾ この資本による機械的規模を、中國民族資本による華人紡績に比較すれば、一九三六年に於て、「在支紡績」は精紡機二百十六萬錠、織機三萬臺に對して、華人紡績は精紡機二百六十九萬錠、織機一萬八千臺であり、ほぼ互格の状態を示してゐる。²⁾

併しながら、中國紡績事業に於て無視することが出来ないのは、英人資本による經營である。即ち、日露戰爭（一九〇五年）より辛亥革命（一九一一年）に至る期間、中國紡績事業は日・英・華三國勢力の鼎立を示したのであるが、歐洲大戰（一九一四年）以來、英人紡績の不振に對して「在支紡績」の發展が顯著となるや、この鼎立は日・華の對立に置き代えられることゝなつた。いま方顯廷の調査によれば、日・英・華三國紡績の勢力は次の如き消

1) 樋口弘、日本の對支投資研究、242—3頁。

2) 日本綿業俱樂部、内外綿業年鑑、昭和十五年版、支那の部。

長を示してゐる。³⁾

	一九一四年 (指數)	一九二二年 (指數)	一九三〇年 (指數)
華人紡績	三三、六六六 (100.0)	二〇六、七〇〇 (三六・四)	二、三九五、七九三 (三七・六)
日本紡績	三三、四八八 (100.0)	一、二六八、三四四 (五三・三)	一、六七四、八四四 (七七・四)
英人紡績	九七、六六六 (100.0)	一五三、三三〇 (一五・八)	一五三、三三〇 (一五・八)
合計	九三、八三三 (100.0)	三、四八三、四四四 (三五・二)	四、四三三、九六六 (四九・六)

斯る状態にある中國紡績事業にとりては、日華經營の競争と云ふことがらが、中心問題として取り上げられるし、またこれを華人紡績の立場から見れば、「在支紡績」より受けたる影響若しくは牽制として考察せられるのである。そこで私は、企業經營の面より見たる、「在支紡績」と華人紡績との對立の關係を、斯る點から問題としたいと思ふ。

二

そもそも龐大な人口と資源とを擁する中國々民經濟は、紡績事業にとりて極めて有力なる消費市場たるとともに、他面有利なる生産をも可能ならしむるものである。殊にこの事業は、資本主義的生産組織のもとに發展し、機械的技術の進歩また目覺ましきものがあるとは云へ、本來的には加工度低く、反面勞働に依存するところ大なる事業であるが、この勞働が低廉且つ豊富に獲得せられる中國々民經濟にありては、この事業の成立の條件は、まことに好都合に具備せられてゐると見ることが出来る。

一體中國民族資本による工業が工場生産組織を取り入れ、資本主義的經營の段階に入りたるは、日尙ほ極めて

3) Fong, H. D., Cotton industry and trade in China, Vol. 1, 1932, p. 8.

淺く、未だ小規模の粗放的經營に止ると考へられるうちにありて、ひとり紡績事業は資本化の程度著しく、民族資本工業の中核を形づくつてゐる。このことは、一九三三年の劉大鈞の次の調査によりても¹⁾何ふことが出来る。

工場法適用民族資本全工場 紡績及び兼營織布工場	工場數	資本額	職工數
(比 率)	二、四三	四六、八七五元	五〇〇、三三
	七	三九、〇九〇	一三、九六五
		(四二%)	(三六%)

斯くの如く華人紡績は、中國々民經濟に於て極めて重要な地位を占むるものではあるけれども、その經營の内容と云ふ點に於て、華人紡績は常に「在支紡績」に比して不利なる條件を忍ばなければならなかつたし、それ丈けにその發展は遅々たるを免れ得なかつたのである。これが原因に就ては、例へば金國寶は、²⁾

一、資本的規模（資本金及び積立金）の小なること

二、職工能率の小なること

三、機械技術の改良及び減價償却の小なること

を擧げてゐる。

併し乍ら斯る考察は、製造加工の部門にのみ着目したるものであり、經營の全般に亘る本質的考察ではない。およそ如何なる工業經營も、原料の調達、製造加工ならびに販賣の三つの部門が一貫的に調和することによりてのみ、その健全なる發展を期待し得る。いま華人紡績が、右の如く不振に甘んじなければならぬとすれば、その據りて來るところは、もとより程度と形態の差こそあれ、これら三つの過程のいづれにも求められる筈である。

- 1) 劉大鈞、中國工業調查報告書、軍事委員會資源委員會參攷資料、第二十四號、いまは名和統一、支那に於ける紡績事業と棉花、學術振興會報告、東亞經濟研究(1)に據る。
- 2) 金國寶、中國棉業問題、55—6頁。

尤も斯る經營上の諸條件を、根本的に、廻りて考察すれば、資本の構成と運用との拙劣に求められるであらう。³⁾斯くの如き中樞的な點に就ても、調達、製造、販賣などの部門に於ける末梢的な諸點に就ても、所詮華人紡績は「在支紡績」ならびに我國内地紡績に及ぶことが出来なかつたので、これが對策として、しばしば政治上の手段が講ぜられたのである。この政治上の手段は、云ふまでもなく、日貨排斥としての關稅の引上げや不買運動ならびに同盟罷業などを指す。

斯る事情に禍せられて「在支紡績」をはじめ我國内地紡績事業の經營は、一時阻害せられることなしとなかつたけれども、常によくこれを克服して、よくその大をなし遂げたのである。加之、「在支紡績」なるものが、我國紡績事業の經營の輸出として、右の如き日貨の排斥を直接の動機となし、當時我國内地に用ひられたる機械設備をそのまま移し植え、且つその經營上の諸政策を採用することによつて、その實體を形成したのであるから、この「在支紡績」の華人紡績に對する優越は、實はそのまゝ、我國紡績事業の優越を反映するものに外ならない。

斯る優越は、華人紡績の經營に影響を與へざるを得ず、その點に於て華人紡績は、とも角今日まで、「在支紡績」との競争に堪えながら、その存立を保ち得たのである。いま若しこれらの點を明かにすることが出来るならば、大東亞經濟建設の一翼としての今後の支那紡績事業の課題も、また自ら明かとなるであらう。蓋し、およそ政策なるものは、常に歴史的地盤のもとに可能となるからである。

三

扱て、二つの異りたる種類の經營が對立競争する場合には、常に相互的な影響が働きかける。この影響は、

3) この點に就ては、拙稿、華人紡績の經營に於ける問題、東亞經濟論叢、一卷四號ならびに拙稿、華人紡績の性格、東亞纖維工業、第一號參照。
4) 小島昌太郎・西藤雅夫、日本紡績事業論、584頁。

これを受くる側にとりて積極的效果を持つこともあり、また消極的效果を持つこともある。更にまたこの影響はこれと與ふる側にとりて意識的なこともあり、また無意識的なこともある。中國紡績事業にありても、日華兩企業の經營の間に、これらの考察が可能とせられる。

ところでこゝに注意すべきは、日華兩經營の相互の影響に就ては、實はその主動性が「在支紡績」の側にあると云ふことがらである。「在支紡績」の成立の直接の動機は、さきに述べたるが如く政治的事情に基いたものであり、この政治的事情のうちに華人紡績の利害も含まれたことは、これを否むべからざるところであるが、とも角「在支紡績」が一つの勢力として中國々民經濟に登場して以來は、華人紡績の經營は、直接間接にこれが影響を受け、これに牽制せられざるを得なかつたのである。この點に「在支紡績」なるものが、既にその時世界的に強固な地位を築きたる我國內地の紡績事業にとりて、經營の輸出と見られる理由がある。

斯くの如き主動性を持つ「在支紡績」の經營が、華人紡績の經營に與へたる影響は、大體に於て消極的效果を持つたと見ることが出来る。即ち華人紡績は、「在支紡績」に比して、常に不利なる經營上の條件を忍ぶことによつてのみ、その存立を全うし得たのである。併し乍ら、他面、極めて限られたる範圍に於てはあるが、それが積極的效果を持ちたることなしとせずと考へられてゐる。即ち華人紡績にとりては、若し「在支紡績」の發展なかりせば實現せられなかつたであらう様な、發展が可能となりたる事實もない譯ではないと云ふのである。

この事實は、日露戰爭によつてもたらされたる好況に求むることが出来る了一般に云はれ、即ち、この好況のために國內に於ける需要は急激に増大したのであるが、他方、恰もこの頃より運輸、金融などの施設が整備せら

れ、且つ政府が國權恢復と民業の復興とに力を致したることなどのために、民族資本による經營が續々として行はれることゝなつた。殊に、この頃成績不良なりし若干の外國人工場を買收して、これを華人經營に移して良好なる成果を挙げたと云ふ事實は、この事業に對する民族資本の自信を昂めるに役立つところ、極めて顯著であつたのである。

この様な機會は、世界大戰の勃發によりても與へられた。即ち、從來世界各市場を支配したる英國製品の供給が減少し、その價格が急騰するや、華人紡績の新設擴張また著しく、民國七年（一九一八年）に於て華人紡績の機械的規模は、中國紡績事業全體の六二%を占め、「在支紡績」は二一%に過ぎざる狀態であつた。¹⁾

併し乍らこゝに注意すべきは、この華人紡績の發展の裏には、政治的事實としての排日貨運動がひそんでゐると云ふことがらである。そもそも世界大戰の勃發は、華人紡績にとりてと同様に、「在支紡績」にとりても絶好の發展の機會であつた。日本紡績事業の經營の輸出が、「在支紡績」として抜き難き勢力を築きたるは、正しくこの頃から數年に亘る期間に於てであつたのである。

それ故に、華人紡績が右の如き發展を示したるは、實は「在支紡績」に發展の傾向ありたることに脅威を受け偶々政治的手段が選ばれたる結果に外ならない。従ひてこの發展も遂に永續することなく、一方「在支紡績」が堅實に進展をとげたるに對して、やがては華人紡績は不振の一路を辿り、劉大鈞の指摘するが如く、投機を除いては資本は損失を續けねばならなかつたのである。²⁾斯る點から我々は、この事實を、「在支紡績」が與へたる積極的効果と見ることは出来ないのである。

1) 劉大鈞、倉持博譯、支那工業論、37頁。
2) 東亞經濟調查局、支那紡績の發展とその將來、3頁。
3) 劉大鈞、前掲、39頁。

さきの日露戦争後の華人紡績の發展は、この點より見れば、これを積極的效果と考ふことが出来ない譯ではなからう。併し乍ら、それも一面の誤りたる觀察に過ぎない。蓋しその頃には「在支紡績」として考へらるべき勢力は未だ存在せず、單に一、二の小規模經營が行はれたるに過ぎなかつたのであり、これを我國紡績事業の經營の輸出と見ることは出来ないからである。當時の我國紡績事業は、漸く現代的經營の段階に入り、諸外國よりの製品の輸入を阻止し得たる状態にあつたから、華人紡績との間には、單に製品の輸出をめぐる角逐が見られたるに過ぎない。それ故に、これを以て、「在支紡績」の經營が華人紡績の經營に與へられたる影響と考ふることが、許され難いのである。

いま我々が、「在支紡績」と華人紡績との經營に於ける影響を論ずるならば、云ふまでもなく、「在支紡績」が一つの勢力として中國經濟に地位を占めたる頃から、之が觀察を進めなければならぬ。この時期が世界大戰勃發以來であること、さきに述べたるが如くである。而かもこの觀察は、常に純然たる經營の立場からなさるべく、右の如く政治的事情を取り上ぐるが如きは、徒らに問題を複雑ならしむるに過ぎない。加之、この政治的事情が表面に現はれると云ふこと自體が、實はその裏面に於て、純然たる經營上の問題がひそむことを意味するのである。斯くの如くに見るならば、「在支紡績」の經營が與へたる影響は、常に華人紡績にとりては消極的效果を持つものであつた、と云ふことが出来る。この影響は、「在支紡績」にとりては多くの場合無意識のものであつたけれども、華人紡績にとりては極めて重大なるものであり、それ丈けに華人紡績の經營が、各種の部門に亘りて改善せられるに至つたのである。

この影響が「在支紡績」にとりて無意識のものであつたと云ふことは、その經營が、華人紡績の經營を牽制することのみ直接の目的を置いたものでない、と云ふ事實を指すものである。元來中國々民經濟は、早くより諸外國の紡績事業の有力なる市場として問題にせられ、このうち英國製品の進出は、極めて著しきものがあつた。我國紡績事業は、夙に、我國内地に於ける同様の事情を克服することによりて大をなし、その餘力が中國に及びて、「在支紡績」を形づくるに至つたのである。それ故に、「在支紡績」にとりては、この英國の勢力の驅逐と云ふことが最大の目標とせられたること、また自ら首肯せられるところである。

このことは、華人紡績にとりても同様でなければならぬ。云はゞ「在支紡績」と華人紡績とは、共通の目的のもとに併存するの立場に置かれたものである。然るに恰もこのことが、華人紡績にとりて消極的な効果を持つに至りたるは、兩者の經營が、經營の段階としては性質を異にするものに過ぎ、華人紡績が「在支紡績」に比して、常に遅れたる經營を脱却し得ざりし結果に外ならないのである。尤もこの事實は、單に紡績事業のみの問題ではなく、實はその根底に於て、中國々民經濟そのものの機構に由來することを、忘れてはならない。

およそ如何なる事業に於てゝもそうであるが、紡績事業はその經營の態様より見て、三つの段階を経るものと考へられる。即ち原始的經營、資本的經營ならびに智能的經營である。⁵⁾ 中國紡績事業にありて、日・英・華の三つの經營は、その創設の當初から、その屬する段階を異にしてゐたと考へられるのであり、「在支紡績」は夙に資本的經營に進んで居り、英人紡績も一部このことが當てはまるに對して、華人紡績は今日に至るまで、本質的には依然原始的經營の範圍を出でずと見られる。

5) 小島・西藤, 前掲, 581頁以下。

華人紡績は五十年來、諸外國人企業との競争に對して、常に不利を忍びつゝも、とも角これに堪えて來たのであるが、それは決して、これら競争企業と同一の經營方策をとつたのではなく、敢て異なる經營によつたと云ふことが出来る。ことに我々は、中國々民經濟のうちに、このことを可能ならしめたる特殊性を見なければならぬ。それ故に華人紡績としては、右の共同の目的を持ちつゝも、尙ほ他面、「在支紡績」からの影響を免れることは出来なかつたのである。

斯くの如くにして、「在支紡績」が華人紡績に與へたる經營上の影響は、「在支紡績」にとりては全く無意識的のものであつたと見ることが出来る。併し乍ら、それが意識的であつたと考へられるものも、全くない譯ではない。而かもその場合の影響は、華人紡績の經營にとりては、積極的な効果を持つものであり、その意味に於て例外的なるものと見ることが出来る。

これを我々は、民國十四年（一九二五年）十一月の「印棉運華聯合會」に見るのである。我國紡績事業にありては、夙にカルテル的統制として、印度棉花の積取りを行つて來たのであるが、この利益をひろく、華人紡績ならびに在華外國人紡績にも及ぼしたのである。即ち大日本紡績聯合會と、大阪商船、日本郵船、大英汽船の三會社との間に、前者が印度棉花の輸送をこの三社に委託する代りに、これに對して三社より割戻金を受くると云ふ契約が、この聯合會と右の三社との間にも結ばれることとなつた。

この聯合會には、華人紡績及び外國人紡績の外に、多數の在華棉花輸入商が參加した。これによつて、從來品質良好ならざる支那棉花に依らざるを得ざりし華人紡績の經營は、「在支紡績」といふに頗る有利なる條件を獲

得することゝなつたのである。元來支那棉花は、單に纖維としての品質良好ならざるのみならず、取引重量を増すために故意に水分を撒布し、時としては棉質や土砂などを混入するなどの悪習慣が絶えなかつたので、ひとり華人紡績のみならず「在支紡績」も、これが對策に少からざる施設をなさなければならなかつたのである。

印棉運華聯益會は、斯くの如くにして「在支紡績」の創意によつて設立せられ、それが華人紡績に對しても共通の利害を持つことゝなつたのである。このことが、英國勢力の驅逐と云ふ點に對しても、もとより間接ではあるけれども効果を現はしたること、云ふまでもない。斯くの如く、華人紡績が、この共通の目的を積極的に認識したる結果として、「在支紡績」の經營が、華人紡績に對して意識的な影響を與へたと見られるのである。影響が意識的であるか否かと云ふ「在支紡績」の側の問題は、實はそのまゝ、華人紡績の側に於ける認識の如何に懸ると云ふことを、我々は忘れてはならない。

さきに私は、「在支紡績」が華人紡績に與へたる經營上の影響は、ひとり資本の構成とその運用と云ふ中樞的な點の外に、また末梢的に調達、製造、加工、販賣などの部門に就ても考へらるべきことを述べた。ところで右の聯益會の設立と云ふ形で現はれたる影響は、調達部門に於て特筆すべきものとして考ふことが出来る。

四

右に述べたるが如くにして、我々は、「在支紡績」の經營が華人紡績の經營に與へたる影響は、「在支紡績」にとりては本質的に無意識のものたりしことを明かにした。而かもこの影響は、これを受けたる華人紡績より見れば、消極的な効果を持ちたるものである。

6) 葉謙吉、西河棉花之生産及其運銷概況、206頁；庄司麟次郎、棉花、541—2頁、471頁；名和、前掲、153頁。

ところで、こゝに消極的と云ふは、決して華人紡績自體の發展が阻害せられるの意味ではない。事實はむしろ逆であつて、華人紡績は、とも角今日まで遅々ではあるが、或る程度の發展をとげて來たのである。乍し乍ら華人紡績なるものは、中國紡績事業全體としては、常に「在支紡績」との對立のもとに考察せられるべきであり、この對立から切離した單獨の考察は許され難い。こゝに中國紡績事業そのものゝ性格が見出されるのである。

斯くの如き對立のもとに、「在支紡績」と不斷の競争を續けなければならなかつた華人紡績は、經營上の諸條件に於て、全く改善の努力なかりし譯でないに拘らず、尙ほ不利なる立場に置かれなければならなかつた。斯くして、中國紡績事業に於ける支配力は、「在支紡績」に委ねられるの外なき状態であつた。もとより、若干の改善の努力と云ふ點のみより見れば、「在支紡績」の興へたる影響は、華人紡績の經營にとりて積極的效果を持つものであつたが、それでも華人紡績は、依然として劣位に甘んじなければならなかつたのである。

いま華人紡績の經營のみを取り上げて、それに改善の跡が見られるとしても、それが華人紡績自身の創意によつたと云ふよりは、實はむしろ、「在支紡績」の經營を模倣し、これに追隨したる結果に過ぎなかつた。この模倣が可成りの程度に行はれる場合にありても、その時には「在支紡績」は、更に一步進みたる改善を行つてゐたのであるから、華人紡績は常に、後塵を拜するの狀態に置かれたのである。斯くして、華人紡績にとりて、一應積極的效果を興へたる「在支紡績」からの影響も、「在支紡績」との競争關係を克服すると云ふ點では、依然として効果を持たなかつたと云ふことが出来る。この事實を指して私は、これを消極的と云ふに外ならない。

扱て斯くの如く、華人紡績の經營に改善の努力ありしに拘らず、依然として尙ほ「在支紡績」が優位に止りた

るは、一にこの「在支紡績」が、我國内地紡績の經營上の諸條件を不斷にとり入れたるに據る。一體「在支紡績」なるものは、企業の系統と云ふ點より見れば、實質的に、我國の有力なる紡績會社の延長である。これらの紡績會社は、既に智能的經營の段階に入れるものであり、この點に於て、我國紡績事業の支柱となり、これを支配して來たのである¹⁾。

然る場合に、これらの内地企業によつて既に經驗すみの經營を、そのまゝ「在支紡績」に適用すること、決して困難ではない。たゞ中國々民經濟の機構は、我國のそれと著しく異なるところがあるので、幾分の修正が行はれなければならないし、この點で本質的には別種の段階にあると考へられる。「在支紡績」が資本的經營の段階にあると云ふはその意味であり、若し何らかの條件が満されるならば、智能的經營に進むこと必ずしも困難ならずと見られるのである。

經營の段階に於て本質的に異なる華人紡績は、經營上の改善ありしに拘らず、所詮「在支紡績」に及ばざりしと、自ら明かであらう。元來華人紡績は、多くは専ら勞働の低廉に頼り、豊富なる資本による機械的技術の優秀に頼らざる經營であり、その點に原始的經營の特徴が見出されるのであるが、この經營上の改善も、資本支出の大ならざる方面に重點を置かざるを得なかつたのである。

この改善と云ふ點に於ける「在支紡績」からの影響は、他面、經濟恐慌によりて促進せられたることを忘れてはならない。即ち、一九二九年の世界大恐慌は中國にも波及し、華人紡績はこれが對策として、各部門に亘る經營の合理化を企てざるを得ず、それが同時に、當時の政府の經濟建設運動に即應する所以でもあつた²⁾。斯る傾向

1) 小島・西藤，前掲，589頁以下。

2) L. G. Ting, Recent development in China's cotton industry, 1936; 丁佑，支那棉業最近の發達，太平洋問題調査部，支那經濟建設の全貌，206頁以下參照。

に應じ、且つ銀行資本が紡績事業に進出する程度が強大となるに従ひて、或る程度資本支出の大なる改善も、漸次に行はれるに至つたのである。

ところで斯くの如き消極的效果を持つに過ぎざる改善は、多くの場合製造加工の部門に集中せられ、調達及び販賣部門に於ては比較的それが乏しかつた。このうち、製造加工部門にありては、機械的規模の擴大、機械的技術の改良、労働能率の向上などの諸點が、主要なるものとして考へられる。いまこれらを順次に問題としたいと思ふ。

第一の機械的規模に就ては、我國紡績事業の最近の技術の範圍では、大體精紡機五萬錘が適正なる最少單位と考へられて來た。もとよりこの規模は製品の種類によりて異なるし、また技術の程度によりても一樣ではない。いまこの點を考慮に入れるならば、「在支紡績」に於て、一工場五萬錘のものが二五・六%、四萬錘のものが三三・三%を占むるの事實は、⁴⁾ ほど適正なる規模と見ることが出来る。

これに對して華人紡績にありては、一九二五年度に於て一工場五萬錘のもの、四萬錘のもの及び三萬錘のものが、それぞれ一二・八%、二八・六%、三八・六%であつたが、一九三六年度にはそれぞれ、一四・七%、一二・一%、二四・二%に變化してゐる。⁵⁾ このことは、製造種類の大なる華人紡績に於て、相當顯著なる機械的規模の擴大である⁶⁾と見ることが出来る。

(註)「在支紡績」にありては、全工場の六〇%以上が唯だ一種の製品を生産するに對して華人紡績にありては、製品種類四のもの三・一%、五のもの二・四%、三のもの一・五%に達してゐる。³⁾ この製品の種類が多いと云ふことは、ひとり精紡機に止らず、これに先行する各工程に於ける機械的設備に就て、浪費を伴ふことが多いのであるが、「在支紡績」にありては夙に製品種類の單純化が行はれたるに對して、華人紡績にありてはむしろ逆の傾向を示してゐるのである。

3) 小島・西藤、前掲、265頁。
4) 1936年度。在華日本紡績同業會上海支部調査。
5) 同業會、前掲。
6) 同業會、前掲。

紡績事業に於ける機械的規模は、周知の如く、最終工程たる精紡機錘數を以て表現せられる。併し乍ら、斯る表現をとるところの機械的規模は、諸工程に於ける機械的技術の如何によりて、その内容は、決して一樣ではない。この事業にありては、特に中間工程を省略する技術たるハイドラフト (high draft) の發明によつて、一定量の生産に對する機械設備の所要量、即ち機械技術の進歩は、極めて著しきものとなつた。それ故に機械的規模の問題とするに就ては、常に反面に於て、その機械的技術を考察しなければならないのである。

そこで次にこの機械的技術に就ては、華人紡績の共通なる特徴は、それが極めて舊式のものであると云ふことに注意しなければならない、いま各種の機械を綜合して云へば、一九一九年より一九二三年に製造されたるものが最も多く、いづれの工程に於ても、二三%乃至四五%の大を占めてゐる。なかには、華人紡績の發展の著しかりし世界大戰勃發當時の機械を、今日未だ使用してゐるものも少からずあり、更に甚だしきに至つては、光緒末の機械を用ふるものも相當にある状態である。⁷⁾

併し乍ら、斯くの如き華人紡績にありても、「在支紡績」の機械的技術の改良に刺戟せられて、一九三一年以來ハイドラフト精紡機を設置するものが漸次現はれるに至つた。殊にこゝに注意すべきは、圓價の低廉を利用して、我國に精紡機の注文を發するもの少からざりしことである。

機械的技術の改良は、單に紡績部門にのみ限られる譯ではない。即ち織布部門にありては、「在支紡績」は夙に自動織機を使用して來たのであるが、華人紡績にありては、一九三四年に於て、僅か一工場のみがこれを使用してゐるに過ぎなかつた。⁸⁾その後、我國への織機の注文などより判斷しても、自動織機の新設が漸次大となりた

7) 王子建・王鎮中，七省華商紗廠調查報告，69—70頁；國松文雄譯，支那紡績業，94—96頁。
8) 王子建，前掲；國松，前掲。
9) 同業會，前掲。

ることを知ることが出来る。

ところで機械的技術の改良は、紡績部門にありても織布部門にありても、直接の製造加工の工程にのみ限られる譯ではない。それは、動力その他の間接の設備に就ても、これを見ることが出来る。このうち、動力に就ては、労働ならびに機械的能率を大ならしむる點に於て、電力は蒸氣力に優ると一般に云はれる。「在支紡績」は斯る事情から、動力の殆んど全部を電力に求めるに對して、華人紡績にありては、從來兩者相半ばしてゐたものが、一九三六年には電力が八一%を占むるに至つてゐる。¹⁰⁾ 斯る事實は、王子建や丁信らが調査したところによつても、また同様である。¹¹⁾

動力以外の機械設備、例へば採光、換氣、溫度ならびに濕度の調節、輸送などの點に就ては、華人紡績にありては極めて不備であつたが、それも漸次に改良が企てられてゐると云ふ。¹²⁾

第三に労働能率の向上と云ふ點に就ては、これを明かにするに足るべき資料は、未だ充分ではない、且つまたこのことは、他面右の機械的技術の改良によつて可能となるものであるから、それが大ならざる限り、また顯著たるを得ないと考へられる。併し乍ら、例へば機械の運轉回數を増加せしめること、労働者一人當りの受持機械數を大ならしむること、多くの女子労働者を雇傭することなどの諸點に於ては、極めて著しい進歩が見られたのであるから、¹³⁾ 労働能率の向上も相當の程度に實現したと見ることが出来る。¹⁴⁾ 殊に、「在支紡績」がその創設以來實施したる深夜業の制度が、やがて華人紡績にも及ぼされたる事實は注目すべきことである。

(註) いま一九三一年より三四年に至る三ヶ年間の「在支紡績」と華人紡績との労働能率の變化を見れば次の如くである。¹⁴⁾

- 10) 同業會、前掲。
 11) 王子建、前掲、83—4頁；國松、前掲、110—1頁；L. G. Ting, *ibid.*, p. 36;
 丁信、前掲、244頁。
 12) 王子建、前掲、80頁以下；國松、前掲、106頁以下。

在 支 紡 績			華 人 紡 績		
勞働者一人當 棉花使用量	勞働者一人當 綿糸生産量	勞働者一人當 綿布生産量	勞働者一人當 棉花使用量	勞働者一人當 綿糸生産量	勞働者一人當 綿布生産量
一九三二—三三 四〇・三	二〇・八	一五・九	三二・三	八二・二	四六・六
一九三三—三四 四〇・三	九〇	一五・七	三二・三	九二	五二・八
一九三三—三四 四〇・三	九一	一五・二	三二・三	一〇・四	五七・八

右に述べ來りたるが如く、製造加工部門に於て「在支紡績」から受けたる影響は、華人紡績の經營にとりては或る程度注目すべき改善をもたらしたのであるが、それでも尙ほ「在支紡績」に及ばざるところ大であつた。このことを製造加工費としての生産費に就て見れば、最も明瞭である。いま一九三五年度に於て二十番手綿糸一梱の製造加工費は、次の如きものであつた。¹⁵⁾

勞 働 費	動力費	修繕費	消耗品費	包裝費	雜費	合計	在支紡績	華人紡績
六・九〇元	四・八〇	一・〇〇	〇・五〇	一・二〇	〇・五〇	一四・九〇	一・九〇元	五・五〇
							二・二〇	一・七〇
							一・五〇	一・五〇
							一・五〇	一・五〇
							二四・三〇	

このうち、特に勞賃が華人紡績に於て大であることは、極めて重要な點として注目せられる。このことは云ふまでもなく、機械的技術に相當の改良ありしに拘らず、尙ほ「在支紡績」比にして不充分なりし結果であり、「在支紡績」から受けたる影響が消極的効果を持つに過ぎざりしこと、また頗る明かである。

13) 同業會，前掲。
14) 1934年中國經濟年報，110頁；名和，前掲，44頁。
15) 金國寶，前掲，72—3頁。

併しながら斯ることは、單に製造加工と云ふ點より見たる、經營の云はゞ末梢的な現象に過ぎず、問題は實は、機械その他の固定資本の調達ならびに運用と云ふ點に於ける、經營の云はゞ中樞的な缺陷より由來するものである。この點に就てはかつて述べたところであり、¹⁶⁾ また後に少しく觸れたいと思ふ。

五

右に於て私は、製造加工の部門に於て「在支紡績」の經營が華人紡績の經營に與へたる無意識的な影響を取り上げ、それが消極的效果をもたらしたことを論じたのである。次にこのことは、調達ならびに販賣の部門に於てはどうであらうか。我々は、こゝに於ても消極的效果を認めざるを得ないのである。

一體、紡績事業の經營にありては、調達ならびに販賣の部門は、棉花の買付、製品販路の開拓と云ふ點より見れば、これを專業とする商人に委せるを常とする。斯る意味に於ける經營の分離は、我國紡績事業に於て最も顯著で、また頗る巧妙に行はれたが、このことはまた「在支紡績」に就ても同様であつた。

扱て「在支紡績」は夙に江南、東洋棉花、日本棉花などの大企業との間に、調達、販賣の兩部門に就て集中的なる聯繫を保ち、而かも「在支紡績」自身の巨大なる資本の運用によつて、これを有利に實現したのである。この點に於ても「在支紡績」が、我國紡績事業の經營の輸出として考へられるのである。然る結果として、製品が華人紡績に比して極めて廉價良質であり、且つ相當の利潤を實現し得たこと、想像に難くない。

これに對して華人紡績は、これらの部門に就て、大企業と集中的に連繫する機會なく、常に多くの棉花商及び綿糸商と接觸しなければならなかつたし、且つ資本力が大ならざりしため、不利なる條件を忍ばねばならなかつ

16) 拙稿、華人紡績の經營に於ける問題、東亞經濟論叢、一卷四號。

さきに國民政府では、全國經濟委員會を組織し、國內經濟の統制管理を計つたのであるが、一九三三年十月、同委員會指導のもとに綿業統制委員會を設立、廣範圍に亘る綿業の統制に乗り出した。^(註)尤もその直接の動機と目的とは棉花の改良増産にあるが、この委員會のもとに所屬せしめられたる棉花運銷合作社は、國內産の優良棉花を華人紡績に對して獨占的に供給すると云ふ點では、ほど成功を収めたるものと云ふことが出来る。

委員會の機構は次の如くである。

中央棉產改進所	中央棉花貿易管理局	紡績管理局
棉產改進會 棉業試驗場 棉種公試 棉產統計 棉花統計 各省棉產改進所	棉紗及打包廠 推機倉庫 紗布交易所 棉商 各省棉業貿易管理會 運銷合作社 各省棉花貿易研究會	紗廠及織布廠 漂染 紡織學 紡織機器廠 紡織染實驗館

この合作社運動が最近に至りて盛んとなりたることは、實はその裏面に於て、華人紡績が國內棉花の調達に就て、頗る複雑なる機構に永く禍されたることを意味する。こゝにも我々は、中國々民經濟の特異性を見出すこと

第三卷 一三五 第一號 一三五

1) 内外綿業年鑑, 前掲。

が出来る。

中國紡績事業、特に華人紡績の經營にとりては、棉花の調達は、頗る多くの階段を経て行はれる。即ち棉作農民から紡績業者に棉花が落付くまでは、大體三つの形態の市場を通過しなければならない。棉花現地の市は市場、中間市場としての地方市場、ならびに終局市場これである。これらの市場には、さまざまの形の棉花仲買人が階段的に介入し、これらが獲得する中間利益や、斯る複雑なる機構による失費は、また頗る大である。いま、天津市場に於て買入れられる西河棉の實情に就て見れば、最終價格の一三・五%までは、これらの利益や失費によつて占められると云ふ。²⁾

加之、斯くの如き調達過程に於ては、税金公課の類が極めて大であり、また役人に對する賄賂が不可欠なる失費として計上せられなければならない。而かもこの役人が同時に商人たる資格を持つてゐるのであるから、この調達は、ひとり農民に對して苛酷な買上げとなるのみならず、華人紡績の經營にとりても、極めて不利な而かも逃れ難きものとなるのである。合作社運動は、斯る事情の打開策として、極めて大なる意義を持つこととなる。

そもそも、中國に於ける合作社運動は、一九二三年、中國華洋義賑救災總會の手によつて始められたのであるが、特に棉花運銷合作社は、さきの綿業統制委員會の統制を受くるものとして組織せられた。この合作社は、その後これに都市銀行、特に上海の華人銀行の融資が行はれるに及んで、一層強固なるものとなつたのである。³⁾

併し乍ら、斯る合作社運動の意義は、結局棉作農村に對する社會政策若しくは政治問題として考察せらるべきものであつて、紡績事業、特に華人紡績の經營と云ふ立場からは、云はゞ副次的なるものである。たゞそれが副

2) 庄司、前掲、472—3頁。

3) 葉謙吉、前掲、214頁統計表；名和、前掲、153頁に據る。

4) 名和、前掲、156頁。

5) 石井俊之、支那に於ける經濟復興運動(上)、滿鐵調査月報、一七卷七號。

次的であるとは云ふものゝ、調達部門の費用を切り下げると云ふ點では、相當の效果を持つてゐると見て差支へはない。即ち、河北省の實例に就て云へば、從來最終市場價格の二一・六%までが諸掛費として必要なりしに對して、合作社による場合には、僅か四%乃至六%に過ぎないのである。⁷⁾

いま斯る點のみより見れば、紡績事業の調達部門に於て、「在支紡績」が華人紡績に與へたる影響は、積極的な效果を持つたと云ひ得ざる譯ではなからう。併し乍ら、このことによつて、華人紡績が、「在支紡績」に比して果してどれだけ低廉なる棉花の調達をなし得たかと云ふことは、相當の疑問たるを免れない。いまこれを數字的に確かむる資料を缺くのであるが、各種の事情から綜合的に判斷すると、未だ「在支紡績」に及ばざるところ大であると考へられる。それ故に我々は、これを、さきに述べたるが如き意味で、消極的効果を持つものと見ざるを得ないのである。

加之、こゝに注意すべきは、この合作社運動による効果は、華人紡績の經營の立場から、その創意としてもたらされたるものと考へ得ることである。もとより合作社運動そのことには、華人紡績の經營上の利害が反映せられたこと否定し得ないであらうが、それが政府と銀行とに指導せられたる施設たりし點に於て、華人紡績の經營にとりて固有的ならざる、従つてその意味では外部的の手段と見ざるを得ないのである。それが固有の手段たらざるの點では、さきに述べたる排日貨の運動と、本質的に異なるところはない。

六

右に於て私は、「在支紡績」の經營が華人紡績の經營に與へたる影響を調達、製造加工ならびに販賣の各部門

6) 名和, 前掲, 168頁以下; 庄司, 前掲, 476頁。

7) H. D. Fong, Co-operative marketing of cotton, Nankai social and economic quarterly 8-3, 1935, p.565; 庄司, 前掲, 477頁。

に亘りて、その主要なるものを考察したのである。併し乍らそれは、さきに述べたるが如く末梢的な點に就ての考察であり、その據りて來る中樞的な點の考察に及んでゐない。そこでいま、斯る中樞的な點に就て論を進めたいと思ふ。

由來、華人紡績に就ては、その經營組織の非合理性が指摘せられる。そしてこの非合理性と云ふ點に就ての觀察は、特に人的機構の缺陷に集中せられるのである。もとよりこのことは、紡績事業にのみ限られたるものではない。それは、民族資本によるあらゆる工業に見られるところであるが、偶々その中核たる紡績事業に於て、その特徴が著しいと見られるのである。

斯る事實は、しばしば管理の劣悪と云ふ語で表現せられる。この種の表現によれば、華人工場の管理組織は、通常、無知や、情實や、中飽 (squeeze) で頽廢して居り、經營者はたゞ、僥倖による利益を頼りにしてゐるのである。¹⁾ このことは同時に、經營ならびに技術専門家の缺乏の結果でもある。²⁾ これらの經營者は工場に於て直接に監督せず、技術家は現場の狀況を檢査することを卑しめ、その結果、生産能率の低下はこれを免るゝを得ない。

併し乍ら、斯くの如きことがらは、經營の中樞的な問題としては、未だ表面的なるものである。我々は更に進みて斯る人的機構のもとに行はれるところの、企業資本の構成と運用と云ふ點に於ける、華人紡績の缺陷を考察しなければならぬ。

一體、自己資本の巨大なる蓄積に頼りて、外部資本を用ふること少き意味で資本的基礎の強固なる企業にありては、常に機械及び勞働能率は優秀となり、工場管理もまた巧妙となるであらうし、これによつて生産費の低下

1) H. D. Fong, *ibid.*, p. 319.

2) 谷源田、中國新工業之回顧與前瞻；方顯廷、中國經濟研究、下、593頁。

がせしめられるのである。「在支紡績」は、我國紡績事業の經營の輸出として、忠實にこれを実行したと考へられるに對して、華人紡績にありては全くこのことがない。

「在支紡績」にありては、ひとり固定資本のみならず、流動資本を含む一切の資本は、株式によつて調達せられ、經營によつて擧げられたる利潤のうち、少からざる部分が、減價償却と積立金とに振當てられる。この積立金とさきの株金の合計たる自己資本は、また設備の擴張に振當てられるのである。自己資本によると云ふ點で金利の負擔を伴はざる擴張は、この減價償却と相まらて、次期の生産費を低からしむるのであり、斯くして「在支紡績」は、常に華人紡績に對して優位に立つを得たのである。さきに私が資本的經營と名付けたるものゝ特徴は正しくこゝに見ることが出来る。

ところが華人紡績にありては、創業資本は原則として他人資本であり、また減價の償却は極めて小であつた。この二つの事實は、全く表裏の關係に立つことを忘れてはならない。元來、減價償却と積立金との振合ひのもとに定めらるべき配當金は、華人紡績にありては、確定公約の官利として支拂はれなければならないのである。³⁾それ故に華人紡績は、その擧げたる利潤のうちから、この官利の外に尙ほ普通配當金たる紅利のための準備金を差引きて、その殘部に就て減價償却をなさねばならないこととなる。⁴⁾

斯くの如き場合に、眞の利潤として積立てらるべき資本は、殆んどこれなきに等しく、それが自己資本として經營の擴張に振當てられるが如きは、これを望むこと全く不可能である。それ故に敢て擴張が必要なる場合には再びこれが資本を外部に仰がざるを得ないのであるが、それはさきの創業資本と同様に、極めて高利の負擔のも

3) 王子建, 前掲, 217頁; 名和, 前掲, 32頁參照。
4) 金國寶, 前掲, 75頁。

とに置かれる。

創業に就ても擴張に就ても、高利の借入金に頼らざるを得ない華人紡績にとりては、右の官利としての配當率も、恐らくは低きものではあり得ない。一體官利なるものは、株主配當金たる性質を持つとは云へ、それが定額たるの點より見れば、實質的には社債利息と同一のものである。華人紡績に於ける自己資本は、斯るものとして理解せられるのである。

いづれにしても華人紡績が、實質的意味に於て借入金利息として生産費に計上すべき金額は、頗る大ならざるを得ない。この結果として利潤は小ならざるを得ず、それがまた減價償却を薄からしめるのである。この償却率は、通常最低五%たるべしと云はれるが、これを超ゆるもの全くなく、而かもそれが、經營の順調なる時に限られ、不況の際には棄てゝ顧られないと云ふ⁵⁾。斯くの如くにして固定資本の評価は、不確實にして不健全なるを免れず、眞の市價を去ること遠く、また頗る危険なるものである⁶⁾。

併し乍ら、およそ減價償却が、固定資本に就てのみ行はるべき理由はない。それが流動資本に就て行はれること、もとより妨げらるべきでなく、而かもこのことは、紡績事業に於ては極めて大なる意義を持つものである。

即ちおよそ棉花を究極の原料とするところの紡績事業にありては、原料費は頗る大なる割合を占め、例へば二十番手綿糸に於ては八〇%にも達するものである。然る際に、流動資本としての棉花が減價償却の對象とせられ、それ丈け生産費が引下げられるならば、それは優に、困難なる製造加工業の引下げを償ひ得るものである。

斯ることがらは、智能的經營の段階に於てのみ可能となるものであり、資本的經營に於ては充分に行はれ難し。こゝに智能的經營なる段階の特徴が見出されるのである。「在支紡績」が、この智能的經營に近接せる經營

5) 金國寶, 前掲, 60頁。
6) 金國寶, 前掲, 60頁, 75頁。

の段階にあると云ふものゝ、このことが果して行はれてゐるか否かは疑問であるが、その可能性なしとは遽かに斷言出来ないのである。

斯くの如きことがらを、華人紡績に望むが如きは、もとより論外である。然る場合に、さきに述べたるが如く各種の部門に亘りて經營の改善が試みられ、それだけ生産費の引下げが企てられたる事實を認めることは出來ても、尙ほ「在支紡績」に比して遙かに及び得ざることとなる。

そもそも企業が、その競争能力を増大せしむるに役立つ條件は、もとより多方面に亘るけれども、生産費の低廉と云ふことがらが基本的なること、改めて云ふまでもない。「在支紡績」との對立と競争とのもとに存する華人紡績の經營も、またこれが例外たり得ないのである。而かもこのことたるや、結局、右の如く、企業資本を自己資本に求めると云ふ點から見た資本構成の堅實性と、それを運用するに就ての巧妙と云ふことがらとに歸せられるのである。

華人紡績の經營に於て、斯くの如き中樞的問題に就て、「在支紡績」からの不斷の影響を受けたるに拘らず、これに刺戟せられて改善を企てたる跡は、殆んどこれを見るを得ないと云つてよい。この場合には「在支紡績」からの影響は、華人紡績の經營にとつて、消極的效果をもたらしたと云ふよりは全く停頓的であり、ひたすらこれに堪えると云ふ形であつたのである。

尤も、さきの借入金利息の高率なることが、生産費の引下げを妨げると云ふ點に着目して、華人紡績の要求により、棉花購入のための低金利の貸付が、一九三三年行政院内農村復興委員會に於て企てられたが、貸付條件の拘束に禍せられて、遂に失敗に歸したと云はれる。いまたとへ、これが成功したとしても、それは單に、中樞的

なる問題としての資本の運用に關することではなく、實は調達部門に於ける末梢的なことがらに過ぎないのであり、その効果も、所詮「在支紡績」に及び得ないと云ふ意味で、消極的なものとなつたであらうと思はれる。

七

以上述べ來りたるところによつて、私は、中國紡績事業を本來經營の段階を異にする「在支紡績」と華人紡績との對立のもとに取り上げ、この兩種の經營に見られたる競争上の影響を問題にしたのである。ところでこの影響は、本質的に「在支紡績」の側にその主動性があり、而かもそれは「在支紡績」にとつては無意識的のものであつたのである。

この無意識的な影響は、これを受けたる華人紡績の立場から見れば、また本質的に消極的な効果を持ちたるものであり、あらゆる點に於て華人紡績の經營は「在支紡績」の經營に及び得なかつたのである。

もとより、調達、製造加工、販賣などの各部門、特に製造加工部門に於ては、華人紡績としては經營上の改善が試みられ、その成果少からざるものもあつたが、それはいづれも「在支紡績」に對して模倣的、追隨的なに過ぎなかつたのである。而かもこれら各部門の改善を可能ならしむべき中樞としての、資本の構成の堅實と運用の巧妙と云ふ一點に至りては、華人紡績の模倣も追隨も、遂にこれを見ることは出来なかつた。

もとより斯る事實は、中國々民經濟特に金融機構の特殊性に由來する。こゝに華人紡績の經營が、歴史的考察のもとに論ぜられなければならないのであるが、この華人紡績と、他方その歴史的地盤を異にする我國紡績事業の、經營の輸出たる「在支紡績」との對立と云ふことがらが、中國紡績事業そのものの特徵、即ち複合的性格とも名付くべきものを形づくることとなるのである。